
聖女物語 ~ ~ ~ 学園編 ~ ~ ~

キンカラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女物語――学園編――

【Nコード】

N9644M

【作者名】

キンカラキ

【あらすじ】

四宝学園、この学校は異能力者を生み出す聖域であった。わけありの転校生、神奈千春が異能力者達の目に止まり、四宝学園の真の目的を明かす。

異種能力者学園SFドタバタバトル

第一章、四宝学園編 第1話鬼の子1

私立四宝大学付属高等学校

大学部、高等部、中等部、初等部、と分かれる、付属学校である。その歴史は長く戦前からすでにその雛形が存在していたらしい。もっともその頃は普通の高校であり、当時の名前も四宝高等学校であつた。

この四宝高等学校が付属学校になったのは今から20年ほど前のことであり、その時は3棟も増える校舎の建設工事の請負契約に一波乱あつたと聞く。

また、その当時、少子化の影響もあり、毎年入学者数が減つてゆき、経営状況もかんばしくなかつた。いったいそんな状況でどこにそんな大工事をする資金があつたのだらうと、地域住民のほとんどが不思議がつているが、生徒にとつては単なるおもしろ半分の七不思議のひとつになっているだけである。

かくして、20年前から付属化した、元四宝高等学校の成果は上々であるといえた。

ここら一帯の地域の児童のおよそ6割が私立四宝大学付属学校に入学し、そのおよそ7割が最終学部まで進学していった。

そして、この大学部、高等部、中等部、初等部の4学部をあわせて地域住民、生徒はこう呼んだ。

しほうがくえん
四宝学園と。

ここは四宝学園の高等部、1学年の教室である。

いきなりドアが開き男子生徒が両手を挙げて飛び込んできた。

「千春さーん、結婚し・・・」

ドゴッ

無言で、飛んできた鉄拳が顔面に突き刺さり、男子生徒はまるで車にはねられたかのような勢いで吹き飛んでいった。

千春と呼ばれた女子生徒は心底迷惑そうな顔をして叫んだ。

「あんだねえ、授業中にこっちのクラスに来るなって何度もいつてるでしょうがぁ、あと名前で呼ぶな」

クラスみんなが私に注目している。そのほとんどが、やれやれ、またか、といった表情を浮かべていた。

「神奈さん、授業中ですよ、皆さん真剣に勉強しているんですから、夫婦漫才も大概にしなさい」

黒板の前で授業をしている、髪を後ろで結んだ女の先生が私に注意をした。クラスみんなから笑いが流れた。

千春は顔を真っ赤にしながら言った。

「先生、夫婦じゃありませんし、付き合ってもいませんし、友達ですらありません。そもそも、私だって迷惑をしているんです」

しかし先生はまったく聞く耳を持たない、というか、むしろ面白がっているかのような顔で答えた。

「あらゝ、そうなの？、傍目から見たらまんざらでもないように見えるけれどもねえゝ、でもいいじゃないのよ、狩矢君、特別優待生なのよ、学校のエリートなのよ、将来有望よゝ」

完全にかかってている。千春はいらいらしながら答えた。

「だって結婚ですよ結婚、私まだ15歳ですし、こいつだってきつと同じでしょう。結婚なんて出来るわけがないじゃないですか」

「あらゝだつたら結婚できる年だつたら結婚してもいいってことなのねゝ」

クラスみんなが大笑いした。

しまった、墓穴を掘った、なんだか最悪の誤解を生んでしまったような気がする。

クラスみんなから笑いものにされてしまつて千春はもうこの場にいることが出来なくなつてしまった。

「失礼します」

そういつて向こうでピクピクしている狩矢の手をひっぱり教室から走り去っていった。

「不純異性交遊はだめよ」

怒りに任せて走り去ろうとしている時に先生のとどめの一撃が千春の心に突き刺さった。

第一章、四宝学園編 第1話鬼の子1（後書き）

こんにちはキンカラキと申します。

聖女物語〜世界編〜から来ていただいた方、そうでない方もこの小説に立ち寄っていただいてもありがとうございます。

いや〜すみません、聖女物語〜世界編〜の前書きにも書かれているのですが、こちらの作品は世界編を描こうと思う前の設定のものです。

やっぱりどうしても書きたくなってしまったので、はじめてしまいました。

世界編に書いたのですがもとのジャンルは学園ほのぼの超能力バトルだったのですが、もう少し深入りして異種能力者学園SFドタバタバトルにさせていただきました。

さて、世界編では（といってもまだ全然書いてないけど、構想だけはある^^;）とにかくひたすら悲壮感漂う作品になる予定なのですが、学園編では全体的に明るく、ほのぼのしている展開にさせていただきます。

とはいってもまあ、バトルですから、それなりの衝突などもあるわけなのですが・・・

基本的に世界編と、学園編はパラレルワールドと思っていただいて結構でございます。

ですので登場人物、設定、などがかぶるところが多々あるかと思えます。

世界編は闇の世界
学園編は光の世界

この両方を連載して行きたいと思っていますので、皆様もしよかつたら見ていってけるとうれしいですm（――）m

第2話 鬼の子2

風を切るかのように、そう表現するのがふさわしいかの様に千春は廊下を走り、そしてまるで飛んでいくかの様に階段を上っていった。

後ろで引きずられているどこかのバカ男子がドタンバタンと床に叩き付けられてガンゴンガンゴンと階段に頭をぶつけていたがそんなことはまったく気にしない。

千春が向かっていたのは屋上だった、とりあえず人目がつかないところ。そう考えて最初に思いついたのが屋上だった。

まるで車に乗っているかのように、景色が恐ろしい勢いで移り変わる。これが道路の上であればたいした感情をもつこともなく、少し退屈なくらいに思うだろう。

だが、学校の校舎内でこれが起こっているのだ、いうならば、校舎の中を車の制限速度オーバーで走っているようなものだ。いや、むしろジェットコースターといったほうが適切な表現なのかもしれない、常人であれば恐怖で叫びだしているだろう。

だが、千春のにとってはこれは普通のことだった。そう、いつもどおりの慣れたことだ・・・

そして、1階から、屋上に続くドアのある4階まで30秒もかからずにたどり着いた。

屋上に続くドアを開ける、思ったとおり誰もいない、あるのは転落防止用のフェンスと貯水槽だけである、屋上から校庭を見ても体育の授業をしている生徒達がいるだけで、上を見上げて屋上の様子をうかがっている生徒などいるはずもなかった。

「ふうっ」千春は一息つくことが出来た、勢いに任せてつい教室から出て行ってしまったが、あのまま教室で笑いものにされているほうがゾツとする。

まったく、どうしてこんなことになってしまったんだろう、私は普通の女の子でいるはずだったのに、そのために特訓をしたのに。すべてはあの時からだ、あんなことが起こらなければ、私はごく平凡などこにでもいる女子高生でいられたはずだったのに。

身長148センチ、体重38キロの小柄な体型、髪はちよつと赤みがかった茶色で（生まれつき）肩にかかりそうだから、後ろで結んでいるどこから見ても違和感のない高校生でいられるはずだったのに。

（もしかしたら、私が普通を求めるのはお門違いだったのかなあ）はあゝ、と千春は大きいため息をついた。

でも、それでもこの学校から逃げることは出来ない、少なくともこの四宝学園は小学校、中学校の頃と比べれば、楽園だったからだ。

「千春さん、君の愛情表現を全身で受け止めたけど、なぜだか体が痛くてたまらないんだ。申し訳ないけど、立ち上がらせてもらえないかな？」

不意に後ろから男子の声が聞こえてきた。あつ、そういえば、なぜかつれてきてしまったのを忘れてた。千春は後ろを振り返ってみる、あつ、頭が割れて血が噴き出してる。

千春はつかんだ腕を無造作に振り上げて、立たせてやった、うわ！顔が血まみれだ。

「いたたたた」

顔面がかなり壮絶なことになっているのにまったくもって緊張感のないセリフを吐きながら狩矢は立ち上がり千春のほうを向いた。

その顔でこつちを見ないでほしい、はつきりいつてかなり怖い。

千春はかなり引き気味で狩矢を見た、身長は大体165センチくらいの中肉中背、黒い髪はセットしているのか寝癖なのかかわからないが前髪の一部が天に向かってピンツと立っている、顔はどちらかというと文化系っぽい顔、あまり頼りがいもなさそうだ。その上普

段はそれなりの顔をしているのに真っ赤に染まってしまった顔面のせいで今ではどこぞのホラー映画に出てきそうな雰囲気になってしまっている。

「ひどいじゃないか、千春さん、二人きりになるためとはいえ、やり方が少々乱暴だとは思わないかい？」

「誰が二人きりになるためよ、あんたが授業中に乱入してくるから、私はクラスの笑いものじゃないのよ。はつきりいつて迷惑しているんだから、こっちにこないでよ」

狩矢はいかにもまったく持って予想外だ、といった感じの表情をしながら

「えええええ、迷惑だったの？だって僕はてっきり千春さんが照れ隠しで殴っているだけだと思っていたのに」

「そんなわけないでしょうが、別に私はあんたと、けっ、結婚なんてするつもりはないんだから、付きまとわないでよ」

プイツと千春は赤くなつてそっぽを向いた、狩矢に対して照れているわけではなく結婚という単語を使ったことに対して照れているのだ。だが、そのことが狩矢に伝わることはなかった。

「やっぱり照れているんだね千春さん、ようやく僕の愛が伝わったんだね」

狩矢は心底うれしそうに両手を挙げながら叫んだ。

「全然ちがう、っていうかあんたと話していると話が平行線だわ、とにかく授業中だろうと、休み時間だろうとこっちに来るな、近寄るな、帰れ」

ここまでいったらさすがに狩矢も諦めてくれる、とは思ってはいなかったが、とにかく、最低でも授業中だけはきてほしくはない。

しかし狩矢は珍しく真剣な顔になって、千春を見ていた（ただし顔は血まみれ）

「な、何、もしかして傷ついちゃったの？」

さすがに言い過ぎちゃったかな？と千春は思ったが、狩矢が次に出した言葉は千春の予想とはまったく違うことだった。

「ああ、いや、違うんだ、確か、大事なことを伝えなくちゃいけない、それで千春さんの教室に入ってたんだけど、何だったかな？」

「なによお」

「ああ、思い出したよ、そういえば今日、生徒会で緊急会議を開くから、遅れないでくれって伝えようと思ったんだ」

緊急会議？千春は首をかしげた、千春は生徒会に入ってた日が浅い、緊急会議なんて聞きなれない言葉だ。だが、この四宝学園での緊急会議だ、十中八九アレに関する件だろう。

「緊急会議ねえ、ってあんたそれを伝えにきたのが用事ならなんで教室に入った第一声がアレなのよ？しかも別に授業中じゃなくても休み時間でいいじゃないのよ」

「いやいや、そっちはついであって、僕にとっては愛の告白のほうが人生におけるすべての用事の中で最優先事項なのさ」

あああ、だめだこいつ、はやくなんとかしないと。千春は心底頭を抱えた。

「と、とにかく、あんたのその行動のすべてがものすごく目立つのよ、そしてそれはあんただけじゃなくて巻き込まれている私も目立つの、だからせめてもう少し静かにしていてよ」

「あれあれ、千春さん目立つのが嫌なの？」

「当たり前でしょうが、アレは目立つを通り越してもはや見世物よ、私は目立たず、静かに、そして地味に学園生活を送りたいのよ。だからあんたのその非常に人目に付く行動が迷惑なのよ」

だが、狩矢はまったく動じない、まるで自分が正しいかというかのよう反論した。

「だめだよ、そんなちぢこまってちゃあ、もつと胸を張って大きく生きようよ」

プチッ

「誰が胸が小さいか！……」

千春は無造作に狩矢の腕をつかみ、まるでソフトボールを投げるかのように天に向かってぶん投げた。

「そんなこといってな〜い」

叫び声を上げながら、狩矢は、つかまれた腕を中心にクルクルと回転しながら冗談と思えるほど高く、遠くへと飛んでいった。

これがギャグ漫画ならば、空に星のマークが出てキラーンとでも擬音が浮かび消えてしまうのであろうが、これはギャグ漫画でも、ギャグ小説でもない。

現在の物理法則では大気よりも比重の大きいものは大気に浮かぶことはない、地球の中心に向かって沈んでゆくのだ（つまり地面に落ちる）。狩矢が大気よりも比重が小さければ悲劇を免れることが出来たのであろうが（その場合は宇宙空間まで飛んでいく可能性もあった）、残念ながら大気よりも軽い人間はまだ確認されていない。きわめて現実的に狩矢は放物線を描き校庭を越えて校門を少し越えたところで地面にたたきつけられた。

間違いなく生きてはいないだろう。それどころか人間としての原型を保っているのかも怪しい。

狩矢四郎 死亡 享年15歳

第3話 鬼の子3（前書き）

．．．って、んな訳ないない、狩矢は主人公の一人です、主人公の一人が冒頭でいきなり死んでしまうような物語って．．．結構あるかも．．．

そんなわけで第3話スタート、（、こ、）ノ

第3話 鬼の子3

ハッ、しまった、あまりにイライラが募り、しかも気にしていることを言われてしまったから（言ってない）つい、投げ飛ばしてしまった。

まあ、狩矢だから心配はないだろう、彼は死なない体質だから（誰にでもやるわけじゃないよ、信じて）。

それよりも問題は、狩矢が校門辺りまで飛んでいつてしまったということだ。おそらく校庭で授業をしている生徒達が大騒ぎをしているに違いない。

千春はフェンス越しから校庭を覗き込んだ。あっやっぱり狩矢の周りに人だかりが出来てる・・・やばいかも・・・

とはいえ、警察を呼んだり、救急車を呼んだりすることはまずないだろう、狩矢が死なない体質だということは四宝学園のほとんどの人間が知っている。

そう、狩矢は学校でも数人しかいない異能力者だ、そして狩矢の能力は、即死するほどの攻撃を受けても、数分後にはなにこともなかったかのようによみがえる超絶再生能力。

しかも、身に着けていた衣服まで再生するので、正確に言えば再生能力ではなく、復元能力である。

うらやましい、私もほしい。

そして、私もまた、狩矢と同じく異能力者。

何でも私、かみなちはる神奈千春の家系は数百年に一度、鬼の子が生まれるという言い伝えがある。

そんなこと両親はもちろん、おじいちゃんもおばちゃんも信じていなかったが、実際にその鬼の子らしき私が生まれてきてしまったのでしょくない。

とはいえ、鬼の子といっても別に頭に角が生えているわけでもな

いし、体が大きいわけでもない（むしろ小柄）

ただ、人間離れをした身体能力を持っているだけ。

しかしこんな細腕のどこにあんな怪力が生まれるのか、いつも疑問に思う。

でも、この能力のせいで私はいつも孤独になってしまっていた。

小学校も中学校もみんな私を恐れて近づかなかったからだ。本当は他の子のようにみんなで遊びたかったのに、どうして私だけ他の人と違うんだろう、私はこんな力なんていらない、他の人と同じがい、私はいつもそう思っていた。

そして、高校生になって一ヶ月がすぎた頃、両親から話を持ちかけられた。

「四宝学園に転入してみないか？」と

両親が言うにはこの四宝学園は私のように異能の力を持った子供が集まる特別な学校らしい。そしてそこなら、千春も学園生活を楽しむことが出来るのかもしれないと。

正直私は不安だった、だって、親と離れて生活するなんて今まで考えたこともなかったし、それに田舎の地元を出たことがなかったので、都会の暮らしに慣れることができるかも心配だった。

でも、当時通っていた高校もやっぱり今までどおりみんなが私を恐れて関わろうとしない、それも当然のこと、だって私の住んでいたところは超がつくほどの田舎で小学校も中学校も高校もほとんど選択肢がない、つまりほとんどの生徒が顔見知りというわけだからそんな生活から抜け出したい、その気持ちはずっと前からあったと思う、だから私は勇気を出して唯一の理解者であった親元を離れて四宝学園に来たのだ。

うまく四宝学園に転入できた時は期待と同時に不安も一杯だった、私の正体を知ったらまたみんなに避けられるんじゃないかと、みんなにまた恐れられるんじゃないかと。

だから私はなるべく力を隠して、普通の人を装おうとしたんだけど、転校初日に事件があり、あっさりとばれてしまったのだ。

うつうつ、ついてない、せっかく地元を離れて四宝学園に転校してきたのに、ここでは能力者であることを隠して、平穩に、静かに学園生活を送ろうと思っていたのに……

千春は自分の不幸さを恨んだ。……とまあ現実逃避はこのくらいにしておかないと。

「あああ、しまった、やつちゃったよあゝ」

狩矢が死ぬわけがないのは知っているけど、いくらなんでもやりすぎた、ひどいことをしてしまった。

「ど、どうしよう。あやまらないと、っていうか、校庭にいる生徒がこつちを見てるよゝ」

それはそうである、何しろ、屋上から人が飛んできたのだ。一体何が起こったのか？誰がやったのか？確認したくなるのが人の常である。

「と、とりあえずここにいっても状況は悪くなる一方だし、もうすぐ授業も終わるし、教室に戻ろう」

千春は逃げるように屋上から立ち去った。

それからの授業は生きた心地がしなかった、たしか次が6時間目、理科で、プラズマがどうかいつていたような気がするけど、まったく記憶に残ってない。ついでに言えばクラスの仲間がなにやらひそひそこつちを見て言っていたが、千春にはそれも今はどうでもよかった。

気がついたら授業も終わり、千春にとってはもっとも来てほしくない時間、放課後が来てしまった。

なぜなら、放課後は狩矢が言っていた生徒会の緊急会議である、もちろん狩矢も生徒会役員の一員だ。つまり、嫌でも顔を合わせてしまうことになる。

「一体、どんな顔して顔を合わせればいいのかよあゝ」

千春は生徒会室がある、3階に続く階段を上りながら嘆いたが、

逃げ出すわけにはいかない、しっかりとあやまっておきたいし、会議だってたぶんアレの件だ、早急に対処しないと大変なことになってしまうかもしれない、私のときのように。．．．とはいえ顔をあわせづらい

千春は狩矢に会わないようにコソコソと生徒会室に向かい、時間ぎりぎりになってから、生徒会室のドアを開けた。
すでに生徒会の面子はそろっていた。

第3話 鬼の子₃（後書き）

ごめんなさい m (——) m

第4話 生徒会の面々

「し、失礼しまゝす」

負い目のある千春はおずおずと生徒会室のドアを開けると。

「遅いで、千春ちゃん」先輩の注意が出迎えてくれた。

「は、はい、すみません、その、ホームルームが長引いてしまって」
本当のことをいえない千春は軽く嘘をついて生徒会室を見渡した。
いつ見ても殺風景な部屋だと思う、広さは普通の教室と同じくらい、廊下側の壁には書類などが収められている棚があり、ほかの教室では黒板があるべきところにはホワイトボードがかけられている。
そして、生徒会室の中央には大きな長方形のテーブルがひとつ、イスを囲めば10人くらいは座れそう。

「ほら、こつちやで、千春ちゃん」

テーブルのあいっているイスを進めてくれた。

「あ、はい」

声をかけてくれたのは石原先輩だ、石原アリサ、なぜか関西弁をしゃべる日本人とどこかは知らないけど、外国人の血を引くハーフの人。

その容姿は美人というよりもどちらかというと可愛い系、背中まで届く金髪の髪に、青い瞳、それから口を開くたびに見える八重歯は小悪魔的というよりも活発な印象を与えている。ちよつとだけ口調はがさつだけど、すごく面倒見がよくて、とっても優しい先輩なのだ。

そしてもちろん彼女も異能力者、何でも彼女は精神を操ることができるらしい、精神を乱して失神させたりとか、ごく最近の記憶を消したりすることも出来る。

ほかにも色々と出来るみたいだけど、そのうちにわかるからと教えてくれなかった。

石原先輩には本当にお世話になっていて、以前私が暴走した時に

止めてくれたりとか、その光景を目撃した生徒の記憶を消してくれたりとかしてくれて、もう、石原先輩には本当に頭が上がりません。

とりあえず私は石原先輩が進めてくれたイスに座る。わ！狩矢の正面だ．．．気まずい。

しかし狩矢は顔色ひとつ変えることなく、千春のほうに少しだけ視線を向けると、すぐに生徒会長に視線を戻した。

「これで、全員そろいましたね」

みなが見渡せる位置にあるイスに座っていた生徒会長が口を開く。生徒会長、名前は神崎沙代利、かんざきさよ160センチは超えている女性にしては長身で、いかにも大和撫子といった風貌は男子生徒に人気が高い。

その、腰まで届く綺麗な黒い髪はいつ見てもため息が出るくらい美しい。それでいて、決してその容姿に鼻をかけることのない物腰柔らかな性格はまさに清廉潔白といった表現がふさわしい。

その上学校の成績もトップクラス、．．．なんだか天は2物を与えずっていうのは嘘だと思う。

あと、なぜか彼女だけ、制服が私たちとはちがう。．．．なんでだろう？

そしてもちろん彼女も異能力者。といっても、私は会長の能力はまだ知らない。

以前石原先輩に聞いたことはあったけれど、これまたそのうちわかるからといって詳しいことは教えてくれなかった。

なんでも石原先輩によるとこの学校でもっとも奇跡級に近い異能の持ち主だという話、．．．そこまで言うんだったらもったいぶらずに教えてくれればいいのに．．．っていうかどう見ても石原先輩の能力もチート．．．

今のところはこの四人が生徒会の役員だ。

本当はあと二人いるらしいけど、とある事情で今は四宝学園には

いない。そして、その二人も何らかの異能力者らしい。

ここまできて感づいたかもしれないけど、実は生徒会に入るには条件がある。

それは能力者であるということ。

というよりも能力者は強制的に生徒会に入れられる。だから私も生徒会に入れさせられたという訳。

そして、今はいない二人と先生のうちの何人かを除くと、今の四宝学園高等部には能力者は四人しかいないということになる。

「さて、皆さんよろしいですか？」

会長が皆に確認をし、皆がうなずいた。

「それでは、今から四宝学園生徒会、緊急会議を始めます」

第4話 生徒会の面々（後書き）

第一章はこの面子で話が進みます。

話が進んでゆけばこの倍くらいの人数になります。

文章が稚拙ですみませんm（――）m

ただいま勉強中ですので、もっとうまくなったら、見やすく書き換えていきたいと思っていますm（――）m

第5話 事件勃発（前書き）

いつもより少し長いです

第5話 事件勃発

みんなの表情が強張る。

千春はこんなに真剣な表情になった生徒会メンバーを見たことがない。

いつもはもつとのほほんと、のんびりとしていて、私は調子に乗ってくる狩矢を殴ったり、飛びかかってくる狩矢を蹴っ飛ばしたり、そしてそれを、楽しんでいるのか？あおるかのように石原先輩のエール、そして、会長はまったく我関せず、といわんばかりにいつもの定位置でどこから出てきたのか？紅茶をたしなんでいるのが日課だった。

正直私は会長に「イツニタラセイトカイノシゴトヲスルンデス力？」と問い詰めようと思ったのは一度や二度じゃない。

でも、ようやく、生徒会の仕事が始まるんだ。そう思うと、千春は緊張するとともに高揚する気持ちをおさえられずにいた・・・っていうか・・・生徒会の仕事ってこんなだったっけ？・・・なんか私のイメージと違う気が・・・

「さて、なにをどう話したらいいものでしょうか？」

とか思っていたら会長が人差し指を口に当てていきなり口をつむんだ。

「なんやそれ、しょっぱなからつまづいてどうすんねん、って言うか会議なんやろ？しかも緊急なんやろ？異能関連のこととちゃうんかいな？」

石原先輩が文句を言う・・・正直私も文句を言いたい・・・なんだが緊張が一気に冷めてしまった。

それを聞いた会長はうれしそうに胸の前で両手をパンツッと叩いて。

「そうそう、それなんです、実は異能関連のことなんですよ」

「いや、そんなことは皆予測しとるつちゅーねん、ええから早く本題入ったってや」

「そうですね、会長、そろそろ暗くなってきました。早く進めないと夜中になってしまいますよ」

と、ここで今まで大人しくしていた狩矢も参戦した。．．あれれ？なんだか狩矢がまともだ．．

「うつつ、千春さん、皆さんのこの仕打ちをどう思いますか？」

手の甲を目元に当ててさめざめと泣く会長を見て、千春の会長「完璧超人のイメージがガラガラと音を立てて崩れてゆくを感じた。

「ええからはよせんかい」

石原先輩がきれた。

「は、はい、すみませんでした」

あれ？どっちが会長だったわけ？

「こほん、えー、石原さんが言ったように今回の会議は異能力者に関することです」

ようやく進みはじめた会議の内容に今度こそ皆の表情が引き締まった。

「今回は高等部の生徒ではなく、中等部の生徒なのですが、ある生徒に異能力の覚醒の兆候があると、先生から連絡を受けました」

皆の顔にさらに緊張が走った。

「何年何組の生徒ですか？その生徒の名前は？」とここで狩矢。

「学年は2年生のC組の生徒、名前は遠藤真奈さんと言います」

とここでつい私は声を上げてしまった。

「真奈？女子生徒なんですか？」

「そのとおりです、千春さん、もしかしてお知り合いですか？」

「あ、いえ、知り合いとかではないです」

真奈という名前には全然心当たりがない。ただ、ほんの2週間ほど前も私が学校で騒ぎを起こしてしまったばかりだ。あの時の記憶と恐怖は今でも鮮明に残っている。その真奈という女子生徒もきつ

と今、多大な不安にとらえられているはず、力になってあげたい、能力が暴走する前になんとしてでも止めてあげたい。私のように手遅れになってしまいう前に・・・同じ立場として。

「千春さん、よろしいですか？」

「は、はい、すみませんでした」

「では続けます、彼女に関してはまだ、わかっていないことが多いのです、なにぶん今日起こったことですので」

「じゃあ、能力とかもまだわかってへんの？勘違いとかあらへんの？」と石原先輩が至極当然な疑問を述べる。

「はい、まだ詳しいことはなにもわかっていません、ただ、先生の話によれば、授業中に近くにいた生徒が急に気を失った、との話ですが」

「なんやそれ、そんなもん、貧血かなんかで倒れたんやないんか？授業中に体調不良になる奴なんてそれほど珍しいもんやないで」

「石原さんの言うとおりですね、ですがそれが複数の生徒が同時に気を失った、となればどうでしょう？」

「あゝ、めったにないかもな、というかまずないやろな」

「そのとおり、まずないことだと思います、よって、彼女は異能力者になる兆候が現れたと見てまず間違いないと思います」

「ちょっと待ってください」狩矢が反論した。「その気絶した生徒にもその時の状況などを聞いたのですか？ほかの可能性は考えられませんか？まだ彼女が異能力者だと決め付けるのは早いのではないですか？」

狩矢の反論は正しいといえる。良くも悪くもこの学校では異能力者は特別な存在だ。ある意味生徒達のあこがれでもあり、また、うとましい存在でもある。

特にまだコントロールもままならない初期の段階ではそれこそ恐怖の対象でしかない。

つまり私たちは彼女にこう言わなくてはいけないのだ。・・・明

日から人に会うな、特別教室にこもりなさいと。

もちろん特別教室にこもったら人に会うことはおろか、しばらく家に帰ることも出来ない。

そして、特別教室にこもった時点で彼女は能力者だと全校生徒に宣伝してしまうようなものだ。たとえそうでなくても、彼女のクラスには伝わってしまうだろう、何しろすでに被害者がいるのだから。そこまでして、実は私たち生徒会の勘違いでした。では、私たち生徒会の名誉が傷つくだけではなく、彼女自身の人間関係にも大きな影響を及ぼしてしまうことは想像に難くない。（もちろん悪い意味で）

よって、能力者だと決め付けることは最終的な結論であって、まずはそれ以外のあらゆる可能性を考察するべきなのだ。．．．だが「確かに、狩矢さんのいうとおり決め付けるのには早いのもかもしれません、ですが、すでにもう被害者と思われる方は出てしまっているのです。それにその方たちはいまだに目を覚ましていません。彼女の能力は相当危険なものであると思われるます。

彼女にとって異能力者のレッテルを貼られることは相当の苦痛なのかもしれませんが、でも、しばらく様子見をして、万が一彼女のクラスメイトを傷つけてしまう事態になれば、彼女はそれ以上に傷つくことになるとおもいます」

その気持ちはよくわかる、私も異能力者であることと過去の事件がゆえにクラスでは浮いた存在になってしまっていたし、今でもそうだから。だからこそ、絶対に助けたい。

「わかりました」狩矢がうなだれて折れた。

「ほなきまりやな、じゃあ早速その真奈ちゃんに会いに行こうやないか」

石原先輩が時間が惜しいといわんばかりに早速席を立とうとしたその時。

「あ、待ってください」会長が石原先輩を制した。

「なんや、まだなにかあるんかいな？」

「はい、実はまだ、もうひとつ議題があるんです」
会長は少し頭を下げて言った。

「実は今回の会議は本来はこちらが本題なんです」
会長の言葉に皆の顔が最初よりもさらに強張った

第5話 事件勃発（後書き）

ようやくストーリーが進みだしました。

第6話 異能者達の事情（前書き）

世界観説明タイムです

第6話 異能者達の事情

「えーと、えーと」

なにやら会長が困惑している。

「またかいな、会長はほんまにこういう場が苦手やなあ」

石原先輩がやれやれといった表情でため息をついた。．．．えっ、じゃあ最初のあれはボケたんじゃなくて素だったのか。

「んで何や、本題つて、能力者のことではないか？」

「ええ、ちよつと違うんです」

「ほんなら、今日ここに先生がおらんことと関係あるん？」

会長の表情がパツと明るくなった。

「そうなんです、実はそうなんですよ」

「やつぱそうなんか、いつもこういう会議は先生がしきつとるもんな。慣れない会長が仕切るのはおかしいとおもっとったわ」

石原先輩の表情が少しいぶかった

「それで、なんで先生がいないんや、私たちに伝えることもなく任務にでたんか？そんなに大仕事なん？」

会長の表情が真剣になった。

「ええ、実は、これも本日明らかになったことなのですが、この町、特殊指定区域に『ネメシス』が潜入したとの情報が入ったのです」

「ネメシスやとう！」石原先輩が驚いたように大声を上げた。

はて？ネメシス？聞いたことがない。

「会長、ネメシスって何ですか？」という訳で聞いてみることにした。

「ああ、千春さんはまだ、異能力者になって日が浅いから聞いたことがなかったのですね。ネメシスというのは、ええと」

「ネメシスというのは」とここで狩矢が話に参加してきた。「能力者不当労働開放団体、またの名をネメシスという、彼らはネメシス

の名前のほうを好んで使っているみたいなんだけどね」

「能力者不当労働開放団体？」なんかわかりやすいようなわかりにくいような。

「そう、狩矢さんの言うとおりです。千春さんも知ってのとおり、私たち異能力者は政府によって管理されていますが・・・」

「えっ！そうなんですか？」いえ、今初めて聞きました。（汗）

「なんや、千春ちゃん、知らなかったんか？、狩矢、千春ちゃんに説明しとけて言っておいたやないか」

「え、僕ですか？いえ、聞いてないですけど・・・」

「なにいつとんのや、確かに言っておい・・・た・・・で・・・あつ！」

石原先輩が思い出したかのように声を上げた。

「すまんすまん、狩矢、そういえば、あの後私、狩矢の記憶を消してしまっていたな、そら覚えてないのも無理ないわ」

会長がおでこに手を置いてはあく、とため息をついているのが見える。

「仕方がないですね、あまり時間がないのでかいつまんで説明しますが、先ほども説明しましたが、この国で生まれたほとんどの異能力者、とりわけ、この町、特殊指定区域で生まれた異能力者は、政府によって管理されています。

詳しく言うならば、内閣府所属の、特殊労働庁によって管理され、私たちも四宝学園大学部を卒業すれば、その特殊労働庁に在籍することになり、そこで個々人の能力に適した労働を与えられることになるのです」

「たとえば、私やったら精神を操る能力をいかして、心療内科医とかな」石原先輩が得意な顔で答える。

「ですが、能力者の絶対数は少なく、その上、異能のことを一般市民に知られてはいけけないので表立った行動を取ることも出来ないのです。

「あれ？でも、この四宝学園の人間には異能のことを知られていませんか？」

「ああ、それはですね・・・」

「それはやな」石原先輩が会長の話に割り込んできた。・・・あっなんか会長ちよつとくやしそうな顔してる。

「特殊指定区域に住んどの人間は例外うちゅうことや、そこに住んどの奴に隠し切ることとは不可能やからな、なんせ黙つても異能に遭遇してしまうからな」

「え、それは何ですか？そういえば、今まで聞いてなかったんですけど、どうして四宝学園の人間から異能力者が現れるんですか？」

いまさらながらの質問だ、私はてつきり四宝学園に異能力者が集まるものだと思うっていたけど、さっきの話から察するに、四宝学園そのものが異能力者を生み出しているみたいだ。

「ああ、それに関してはまずは特殊指定区域が何か？って話からせなあかんけど、今回は時間が惜しいからはぶくで、まあ、そのうち教えたるわ。」

まあとにかく、ようは世間一般に認知されなければいいねん、異能に関しては、この特殊指定区域外のほとんどの人間は知っているけれど認めてはいないんや、千春ちゃんも一度くらいは見たことがあるやろ？たとえばテレビ番組の超能力特集とか、心霊特集とかな」

「ゆ、幽霊は苦手です」・・・ブルブル

「なんや千春ちゃん可愛いところあるな、ともかくああいう番組の9割は嘘っぱちでできてるんや」

「きゅ、9割ですか」

「ああ、そんで残りの1割は本物がいかにも嘘っぱちらしく見せているんや」

「はあ」

「たとえば手品とかやな、ほんまはタネもしかけもないのに手品っていう名前を用いただけでトリックがあるって思い込んでしまっやろ」

「でも、どうしてそんなことをするんですか？」

「人間っていうのはおもしろいもんでな、あいまいなもんでも、な
いって否定すると逆に怪しんで調査したくなるもんなんや、じゃあ
逆にあるっていうと今度はどうしてその力が自分には使うことが出
来ないのか不満がる、だから世間にはな、あるかもしれない、って
思わせておいておいたほうがええんや。」

あるかもしれないっていうグレイゾーンをたもっておけば人間い
つかは科学が解明してくれるのかもしれないってそういう心理が生
まれるもんなんや。

つまりは未来任せにして今はそういうものはないけど、いつかは
超能力みたいなものが解明されて自分にも使うことが出来るように
なるのかもしれない、あるいは幽霊の原理がいつかわかるのかもし
れない、けどそれは今ではない、そういう考え方になるんや」

「なるほど、でも、じゃあマスコミは政府の手先なんですか」

「そのとおりや、マスコミも政府の依頼を受けてそういう番組を作
っているんや、何しろそういうことはマスコミの得意分野やからな
ついでに言えば今日までの情報社会を作り出したのも政府や、情報
が多様化すればするほどあいまいにしやすいからな、インター
ネットなんて実は国家間の秘密取引の上で生み出された技術やって
うわさもあるくらいやで」

「石原さん、石原さん、話がずれてきていますよ」会長が石原先輩
を制した

「あ、ああ、すまんすまん、とにかく、異能のことが世間に浸透す
ることは今の段階ではまずないっていうことや、ために千春ちゃ
ん人通りの多いところで私は超能力者だって叫んで、パフォーマン
スもしてみてみ、それでも通行人は手品かトリックやと思うはずや
で、それだけ国民の情報操作は完璧やってことや」

「石原さん、そろそろ」会長が石原先輩をうながす

「ああ、そろそろネメシスの話に戻ろうか。ほな、今度は会長たの

むわ」

「え、私ですか？」

急な指名に会長は戸惑っているようだ

「ああ、私はもうしゃべりすぎて疲れてもった、それにネメシスのことに関しては会長のほうが詳しいと思っ

先ほど、話を横取りしてしまったのを気にしているのかな？ やっぱり石原先輩は気が利く人だと思う。

「わかりました、ネメシスのことは私が説明します」

第6話 異能者達の事情（後書き）

なかなかバトルがはじまりませんね
みなさん退屈してしまっていたらすみません（；
；
）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9644m/>

聖女物語 ~ ~ ~ 学園編 ~ ~ ~

2010年10月8日14時14分発行